

## 中島広足『倭歌諸説』翻刻

白石, 良夫  
北九州大学講師

<https://doi.org/10.15017/10512>

---

出版情報 : 文献探究. 9, pp.10-18, 1981-12-15. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 中島広足『倭歌諸説』翻刻

白石良夫

ここに紹介する『倭歌諸説』は、長崎県立図書館諏訪文庫所蔵本。本書は従来の著述目録類に書名のみ見えて、伝本の不明であったものである。従って、ここに全文を翻印する。

大本一冊の写本で、共表紙仮綴、墨付十五丁。書名は、表紙左肩に打付け書きで「倭歌諸説」と墨書されている。内題はない。該書は写書本と思われるが、広足自筆ではない。およそ長崎における門人の誰かの筆になるものであろう。

翻印の要領は原文尊重主義であるが、次の点において改変した。

- 一、句読点のみ新たに加えた。従って、濁点の有無や漢文の訓点等はすべて底本のままである。
- 一、漢字・仮名は原行のものを使用した。
- 一、二行の割書きは（ ）に入れて一行書きにした。
- 一、本文に見消などで訂正のある場合は、訂正後の本文を採った。該当箇所が少な

く、またそれが単純な写し誤りにすぎないからである。

- 一、挿入の語句なども、もとの文と区別せず組み込んだ。
  - 一、本文の疑問箇所は（ママ）と傍書した。
  - 一、虫損などで読みがたい箇所は□□で示した。
- 翻印を許された長崎県立図書館に感謝申し上げます。

倭歌諸説 全（表紙）

古今集序の首なるやまとうたといふこと、ことわりにたかへり、といふ説ありと聞ぞ、それなほつはらにきかまほしといふ人のために、はやく諸先生の論らはれし事ともを書いていざんか註を加へ、また、おのれかいはまほしきことをも少かきぞへておくりつれば、其入やかて一とちの書となして世人にも見す。

○縣居翁の古今集序考云。やまとうたは云々。やまとは、その本、耶麻登てふ郷よりおこりて、二國の名と成ぬと見ゆ。さて、天皇の御代々々ここに宮敷ませし故に、おのつから日本をすべいふ名の如くも成ぬ。ここは其日本の哥てふ意にて書つ云々。

へきものにしたるは、いともおもひくまなきしわざになつて。  
文久元年六月 中島田翁

○田翁云。郷名<sup>トウ</sup>のりありて一國の名となり、さて又、皇國の總名ともなれりし事、鈴屋翁の國号考に委しき考あるを見るべし。

○又云。考るに、たゞに哥はと有へき事なるを、やまと哥はとかけると、既奈良の朝より専らからことに泥みて、しかいへる也。されど、万葉の億良の哥の端詞には、から哥に對へてこそやまと哥と書し、たゞいざんかありき(是も奈良に降ての事也)。今の京と成ては、惣てやまと哥といふ事の如くおもひ成しなるべし。元慶の紀にも、業平朝臣を能和哥と書たり。

○田翁考。三代實錄、元慶四年五月廿八日辛巳、從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒云々。業平、體貌閑麗、放縱不拘、略有才學、善作和歌(有字、今本無に作るは誤也。或説によりて有字に改む。伊勢物語古意の説もこれに同し)。

から國は世々に主のかはれは、前つ世の詩を漢詩・唐詩などいへり。その世にして漢詩・唐詩といへる事はあらざれば、同じ日嗣しるしめす皇朝にてやまと哥といはんは、理りもなぐ、且いむべきことぞ。

○田翁云。此論いとをしく高し。此翁ならて、たれかはいはむ。

○鈴屋翁の石上私淑言ニ云。ある人又問けらく。やまとつたといひ倭歌といふ事はいかん。まろ答云。夜麻登于多といふは古語にあらず。倭歌とかく事出来て、後にその文字につきていひいたせる

言也。

○田翁云。此説まことにする事也。下にいへる己か説に引合せ見るべし。

問云。しからは、まづ倭歌といふ事をうけ給はらむ。答云。倭歌といふ名目、ふくはいはぬ事にて、古事記・日本紀には見えすたゞ歌とのみある也。倭歌といふことは、もろこしの書籍をもはら學ぶ世になりて詩をも作り、又かの國にも哥といふ事もあれば、かれこれまきはしきによりて、此方のを倭哥とはよぶ也。それにとりてニツの義有へし。一つには、もろこしにて國々の哥を齋歌・楚歌など、わかちていふ義にならひて倭歌とかくか。二つには、すへてもろこしの歌詩に對していふか。大方、和漢・からやまと何事にも對へていふ事おほければ、後の義まさるべし。いつれにもあれ、同じやうなることなから、すこしは其心は入るなる故に二義をあくる也。

○田翁云。二義の中、後の義あたれりといふべし。さて、倭歌といふ事の始て物に見えたるは、万葉集五に、書殿鏡酒日倭歌四首(天平二年のことなり)、又第二十に、先太上天皇詔陪從王臣曰。夫諸王卿等、宜下賦而奏上云云、これ也。さて、後には日本後紀よりして代々の國史そのほかも、漢文にかけける物には多くいへり。これはさもあるべし。

○田翁云。万葉十七卷の伴池主の書れたる漢文には、云々翰苑凌雲、兼垂倭詩云々とあるは、ことさらにからめかしてかゝれたる也。

假字文にはかりぞめにもかくましき名目なれとも、いひなれて後には、物語文などにもまゝ見えたり。さて漢文にても、歌の事をのみいふ書にはたゞ哥とかくへきこと也。この故に、万葉集は詞書はみな漢文なれとも、たゞ歌とのみかけり。

○田翁云。五卷には、いと長き漢文の末に歌あるも、詩なきはすへて歌とのみかきたり。上に挙たる十七卷なる倭詩はことなる書さまにて、外には例なし。十七卷に、漢文と詩とあるつゞきの歌にたゞ歌と書き、或は其詞書なとも書たるはことわりかなひておほゆ。又、長歌を賦と書たるは、ことにからめかしたる也。七言一首と書て詩を出し、短歌二首として歌をならへ書たるもあり。そのかみ、人ミの心に書て、必しも定まりたる事はなかりしも、是にて知へきなり。

倭歌とかけるは、右にひく二つのみなり。かれも第五卷なるは、その時に詩なとも作りけむゆゑに、わけてかける事も有へし。

○田翁云。五卷(二十五丁)、書殿饗酒日倭歌は、鈴屋翁書入の万葉にも、此に倭歌と書るは此時送別の詩もありしに對して書るならん、上に日本挽哥と有しと同じかるへし、とあり。

第廿卷なるは詔命の詞なれば、是又詩にまきまき事有ぬへき故也。その外、倭歌とかけることなし。

○田按に、廿卷なるは倭歌とはかゝす。和歌と書たるにて、おもふに是は和歌の事なるへし。其故は、奏字の下に、即御口號曰、安之比奇能云といふ太上天皇の御製ありて、次に、舍人親王應詔奉和歌一首云とあり。然れば、詞書に、賦

和歌而奏とあるは、御製歌に和の歌を奉れと詔らしを、しか書るものにて、これも和哥の事なりけり。此集中に、やまとうたといふへき所に和歌とかけるは一所もある事なし。又とごころに和歌とあるは、後の集に返しといへる物にて、答哥也。詩の和韻といふ事にならひてかける和字にて、やまと哥の義にあらず。

○田云。和韻の意にてかける和歌の合字はいと多くて、挙るにたへぬと、一ツニツ出さば、十七卷、敬和歌其詞云・同、右大伴宿禰池主報贈和歌・同十六、應聲和歌一首・同、作和歌酬咲也・同、佐伯宿禰東人和歌一首・同、娘子復報贈和歌一首(目六和字ナシ)・同、大伴宿禰家持和歌三首。なほいと多かれと、皆同しさま也。

又今の印本、外題に萬葉和歌集とかけるは、事をしらぬものゝみたりにかける事なれば、いふにたらず。和哥集といふ題号は古今より始まる事也。さて、延喜の勅撰集を古今和哥集となづけ、真字序に、夫和歌者とかき出し、紀氏の新撰の序にも和哥といへるたぐひ、哥の事のみいふ書に和哥といふは、すこしいはれぬ事なれとも、ふとおし出していふ時には必和歌といふかなへてのならひになりて、後まはいよくさのみかきあぶめり(拾遺集五に、康保三年内裡にて子日せきせ給ひけるに、殿上のをのことも和哥つかうまつりけるに)。

○田云。假字文に和哥とかけるは猶多かり。紫式部日記、和歌ひとつつ、つかふまつれ・源氏玉かつら、監詞此和哥はつか

うまつりたりとなんおもひたまふる(こはちちくしき人の詞也)・柴花祭の使、ぬし(師也)。調其たちわきが和哥にめぐりきや・月の尊、和哥のかたにもいみしうしませたまへり。

問云。倭歌とかく事はうけ給はりぬ。やまとつたといふはいかゞ。答云。夜麻登于多といふは古語にあらす。倭歌といふ文字につきていひ出せる言也。すべて詞に、もとよりの古言と文字につきて出来たる詞と有也。たとへは、宗廟を久尔伊弊とよみ、納言を毛能麻宇須都伽佐とよむたくひ、古語にあらす、文字につきていひいたせる詞也。夜麻登于多も此たくひ也。それにつきてことわりをもていはく、唐にも歌といふ事有。又詩にもまかへは、倭歌とかむは猶とわりなれと、于多といふことは唐にはなけれは、まざるることなし。されば夜麻登于多といふはわづらはしき事也。しかはあれと、おしなへて倭歌といふによりて、其文字のまんにやまとつたとよぶ事もあまねくなりて、自然の古言のやうにおもふ人も有也。されは、今しかよぶを必あしんとにはあらぬと、其本のおこりをよくわきまへおきて、俗説にまよふへからす。夜麻登于多といふ事の始て物に見えたるは、伊勢物語に、かりはぬむころにもせで、酒をのみ飲つゝやまと哥にかくれりけり、とあるこれらなるへし。是は、詩などをも作るへきをりふしなる故に、わきてかくもいふへし。又源氏物語などにも、詩をもつくりて混する時には、からのもやまとのもの、なとといへり。常にはたつたとのみ有也(繪巻云)。つくりけるふみとものおもしろき

所々うちすし、やまとつたもことにつけておほかれと云々。榎本巻云。からのもやまとのものも哥とおほかれと云々。うつほ物語藤原君巻云。よはひびびみのやまと哥なきは人あなつらしむるものなり云々。

○田云。此例を猶あげは、鈴虫、そのよ哥とも、からのもやまとの心はへふかうおもしろくのみなん・御幸、近江君御やまとつたはあやしくともつつけ待りなむ。吹上下、かはらけたひくになりて、君たちやまとつたあそはす・同、かはらけとりてやまとつたよみ給へり・順集、云々いとまのひまにからうたつくり、やまとつたよむ云々(猶あるは、香川景樹か引出しを下に挙たるか如し)

しかるに、古今序の首にやまとつたはとかきいだされたるは、すこしいはれぬ事也。是はもはら哥の事をのみいふ書にて、吳に其根本をかきあらはす所なれば、たゞ于多とのみあらまほしき所也。

○田云。縣居翁の説もはらこにあり(上に挙たるか如し)。さてこのも(下に挙たる)隆正説の如く、對する所ありてかけるは其ころのならはしにて、せんかたもなきものから、猶この文は打まかせて于多とかまほしき事になむ。

しかるに、後世に是を釋するると、夜麻登といふにまほしくの義をつけてことくしくしていひなすは、甚いはれなく、おろかなる事也。夜麻登は哥につきたる言にあらす。たゞ倭歌といふこと出来て、後に其文字につきていひなすはせる言にて、古語にもあらす。其倭字はたゞ人の國の歌詩にわかたむ料にて、此方の歌

といへるまでの事也。それに唐哥にまざるゝ事なき時はたゞ歌とのみいふへき事なるを、後には夜麻登千多といふをめてたき事のやうにさへおもひいふは、大なるひか事也。あるは表曲といふ事のあるに對して、京華の哥を大和歌といふなどといへるは、とるにもたらぬ俗説也。又、大和歌とかきて、哥は大きにやはらくてふことわりなれば、和をもてむねとするなどいふは、いよく論するにもたらぬ事也。夜麻登はたゞ我國の名にて、哥にあつかる事にあらぬを思ふへし。

○香川景樹か古今集正義云。やまと歌はから哥にむかへる名也。そのかみは常に大和歌ともいひけるならし。すなはち紀氏の家集にも、やまとうたしれる人をめしてと有。また順集に、やまと哥えらふ所を梨壺におかせ給ひて・高光集に、やまとうたひとつそへて・伊勢物語に、やまと歌にかくれりけり、など見え、また字音のまゝにわかともいへり。こは、詩のさかえたるにおされて、此ころよへる稱なるへし(たとへは、吳琴のわたりて後、こなたなるをは大和琴と名つけ、唐瞿麦の取はやされて、本よりあるを大和なてしことわかちよふ類ひ也)。

○田云。万葉五、梧桐日本琴一面云々、ともあり。此類例の事、下に委しくいふへし。やまとうたは、万葉に日本挽歌・倭歌など書たるよりとなへぞめし名目にて、いとふるし。さてもはらとなへしは、景樹かいへる如くなるへし。

さて詩学さかに行はれ、哥は入しれぬ埋れ草となりて世におとろへはてたるを、此たび撰集の事おほし興されし時にあひて、其

勅をさへかうふりしには、いて此道をおほやけに復さんの心より、我やまと哥いとけましていへり。さは時俗の稱へに従ひて、其意を寓したる也。此序の全意ここにあり。心をもちひて見るへし云々。

○田云。真名序に夫和歌者と書出せるに打あはせて、やまとうたはとかわれたるものとは見ゆれと、此景樹の解さまはよろしく聞ゆる也。撰者の意、必ここにありへき事、序の終の詞にいちしるければ、かくちからを入て註しおくへき事にこそ(真名序・假名序の事、野之口隆正か歌日記の説、まことにさる事也。そは彼書につきて見るへし)。

○野之口隆正かうた日記云。やまとうた、真淵翁の古今集序考に(写本にて一卷あり)、やまとうたはかうたにむかへていふときのことにて、つねはたかうたといひてありぬへし、といひて、その例證をおほくあげ、貫之主のやまとうたはとかきいたされたるをとかめ、こもやまとといふことをはぶき、うたは人のころをたねとしてといふへきことなり、といはれたるは精微き説にて、けにさることなり。しかるに、同じ貫之主の土佐日記を見るに、真淵翁のいはるゝ定のことく、からうたにむかへたるころにのみやまとうたとかき、さらぬところにはたかうたとしるじてあり。貫之主かれにはあやまらて、これにはあやまれることあやしとおもひ、たちかへり古今集序をよくみれば、からのうたにもかくぞあるへき、といふ詞あるなり。なにこともすべれたる人、このことにはすべれたることあるものにて、真淵翁にあらすは、

いかてかざる例證を見て、貴之主のかられたるものを難むへき。しかるに、貴之主はやくその定をしりて、からのうたにもかくぞあるへきとかうんため、まづやまとうたはとかき出せるはまたすぐれたる文かきにてぞありける。とりくくにめてこしそスズコトの俊傑の真淵翁か、見おとせるすぐれびとの貴之主か、用意を見いたしたる隆正も又すぐれひとやいはまし。

○或人云。古今集流布本の序に、そもく哥のさまむへなり。からの哥にもかくぞあるへき、とあるに對へて、やまとうたはと書出せる也、と野々口隆正か歌日記に論しおけるは確説也。然し、からのうたとの字を添へて唱ふるに對へは、やまどのうたとこれにもとの字添へされは相對せず。の字を添ふれば、七言とする註に引たる本は、からうたもかくぞあるへきと有りて、の字無し。然れば、初のやまとうたも、の字無くて能くぞ對せる。

○田云。此のもし有無の對語の事、下の延約の論の所にいへることあるを見るべし。

抑やまとうたと云事は、漢土の詩を吾朝にしてからうたと稱せり。それに對へて固有の哥をやまとうたとは云へる也。万葉集に山上憶良の挽哥、愛河波浪已先滅ニの漢風の挽哥を書し次に、日本挽哥と標して、大王能壽保乃朝廷ニの長哥を載ぬ。されは愛河ニはからのしめひうた、大王能ニはやまどのしめひうたと云、意にて、日本挽歌と書し也。早く神龜の昔より云と習ひたる對言ぞかし。さて其やまとうたといふを漢字に書くとしては

日本歌・倭歌なども書たりつるに。

○田按に、此憶良ぬしの日本挽歌は、万葉五卷に、盖聞四生起滅方夢皆空と、いと長き漢文ありて、愛河波浪已先滅、苦海煩惱亦無結と。從來厭離此穢土、本願記生彼淨刹。日本挽歌一首大王能とと書たり。目錄には、筑前守山上憶良挽歌一首并短歌とありて、長歌の方のみをさしたるは、もとより歌集なれば、さもあるへき事也（此末に同人の哥のみありて、日本とも倭とも書る事なし）。さて此詩をからのしめひうた（又はかなしみのうた）といひし事はなけれども、日本挽歌と書しに對へてもへは、此詩はからのしめひうたといはいふへきさまなれば、其意にてと或人のいへるはさること也。しかはあれど、此時いままたさる名目のありしにはあらず。たゞ其意をもて目しるしに此方の歌にのみ日本挽歌とは書たりしなり。かく相對する時、其意を受けて目しるしに書ならひしより、其目しるしをやまとうたと唱へしか。唱ふるにつけて、詩をもいつしかからうたといふやうにはなれりし也（やまとうたは倭歌の文字によりてきてきたる言也、と鈴屋翁のいはれたる説、上に拳たるをおもひあはすへし）。しかるを、或人の、神龜の昔より云と習ひたる對言とし、やまとうたといふ言を漢字に書として、日本歌とも倭歌とも書たるやうにいへるは、本末のたかひなりけり。からうたといふ言のまほしくもの見えたるは、土佐日記に、あゝしの

ゝしりてから哥聲あげていひけり・同(王維か仲丸を送る詩の事をいふ所)、かしこのから哥作りなどしける(かしの云々は、唐國にての事なればかくいへり)・同、此をりにある入々、折ふしにつけてからの哥とも時に似つかはし(口いふ)から・やまと(對へいへるは、古今序なるも源氏なるも)上に出して入々の説を拳たるか如し、など見えたる。其比はかく打まかせたる名目にしてもいへりし也。さるは、其はしめ唐國より詩書を傳へて、皇國にて讀ぞめし時は音のまに詩と唱へし事いふもさる也。さて其詩はやかて此方のうたとしりては、からうたともいはいふへけれど、なほさる名目はあるへくもあらず。そは彼方の詩と唱へ、此方のはもとまり宇多といへれば、ならいふ時もさるにまきさる事なし。さるを目しるしの文字を書につけて、此方の宇多に歌字をあて、其歌をいはゆる万葉書の真假字に書つれば、詩にならへては文字つかひ讀さまこそかはれ、書つらねたるおもむきは似たるものなれば、そを分む為に、此方のを日本歌とも倭歌とも書つる也。しか書つるにつけて、上にもいへる如く、其合字をやかてやまとうたとよみしか、よめるにつけて詩をはからうたといふやうにはなれりし也。さるは對言にてはあれとも、猶やまとうたは日本歌、倭歌の合字より出たる言なる事いちしるし。さてそのからうたも、此方のうたに對へて此方の讀もてなたらかに唱ふる時こそあれ、猶常に合字音にて詩と唱へし事、今ノ世もおしなへてしかいへるにて

しるへき也。中世よりこなた、假字文に書たるものはことにならぬ、此方の詞のみにていへるなれば、此方の歌に對へぬ所にも、土佐日記などの如く、からうたとのみ書つる也。さて昔は唐の詩文をよむに、此方の詞にてよまるかきりは訓讀にして例なめれと、全き漢文の中なる詩などをは、ことさらからうたとは唱ふへくもあらず。されは万葉なるも長き漢文の末に、愛河云々の詩ありて、それは詩なる事いふもさるなれば、何とも名目はかす。たゞそれにつぎて書つらねたる此方のをのみ、其詩に對して日本挽歌と書つる也。此差別をよく思ふへし(猶此すちの事ともは、上に拳たる後屋翁の説に詳なるをよくよみわたしてしるへき也。十七卷に七言一首・短歌二首と對へ書たるも、ともに音にて唱へしなるへし。なごことのからうた・やまとのみしかうたとはよむへくもあらず。短歌の方はたゞみしかうたとはよみもしつらん。此前後、長歌を多く書つらねたればなり。七言一首は音のまくなりし事、いふもならなり。さて是は詩歌ならざれば、も、歌の方をたゞ短歌とのみ書□□□□よろしき書□□□□こそ)。天平勝宝年中より國名のやまとに和字を假られしかは、其和字と歌字とを取併せて、和歌の合字を作れるなりき。漢人、吾朝をは倭と稱せしは、山海經を始め史記・漢書の類に枚挙に遑有らねと和と讀ひし事は無し。唯、書經に和夷の名目見ゆるのみ也。況や本邦のうたを和歌と稱せし文は見る所無し。何ぞやまとうたの名目漢文に権輿せむ。



○田云。國名の倭字を和字に改められし事は、天平勝宝四年十一月の三日より二十四日までのあひたりけんといふ事、略く國号考に委しき考あり。猶、倭字の事も漢籍を引て詳にいはれたるを見るへし。さて、和歌といふこと、漢文にかけるものには多くいへり、と私淑言にいはれたるは、皇國にて書たる漢文の事なまはいふもやうにて、日本後記よりして代々の國史とあるにても、其事はいちてりなきものなま。もとより漢國の書に和歌と書し物はあるへくもあらず。然るを、何ぞやまとうたの名目漢文に権輿せんか或人のいへるは、いかなるころえたかひにかあらん。皇國にても、漢國風の文にかけるをばたし漢文とのみいひて、日本漢文とも倭漢文ともいはず。詩も皇國にて作れるも、たし詩とのみいへる事古今同じきを、かくいへるは、いとも心運論なる哉。

類例は唐琴・唐錦に對へて、中國の者を和琴・和錦と云へるか如し。但し約して呼ぶ時はからにしき・やまどことと謂ひ、延て唱ふる時はからのこと・やまどのにしきと謂ひ、疊てはから・やまどこと、或はから・やまどのにしきなど謂ふ事は、古今通語の類例なり。

○田云。此類例同じきやうにて、やゝ異なる所あり。琴・錦の類は其形似たるものなれば、必かく分ていふへし。さて一たひ其名自定まりては、唐に對せすとも和琴・和錦・和翟琴といふこと古今うこ事なし。歌詩は形なきものにて、たゞ心はへの同じきのみ也。それを聲にあげてうたひ形にあらは

して文字に書時は、から・やまといたく異なるもの也。上に書つらねたるおもむきは、似たるものなればといへりとは異にて、こは其おなしからぬ所をもはらひ入る也。然れば其名目、必しも定まらず。唐に對へぬ時はたゞもとのまに歌とのみいひて、彼和琴・和錦・和翟琴などの如く、打まかせて和歌といふ事のなきは、今世にいたるまでおなじき也(朝廷にて詩のみしく行はれし世には、歌の事のみに所にも、詩に對へる心にてやまとうたといひ、和歌と字音にやへ唱へし事、上に孝たる證文とも如し。されど、なほこれもとたてといふ時の事にて、打とけたる常の詞に打まかせてしかのみいへりしにはあらぬ事、物語文ともをよこみわたしてしるへし。歌集の標題に和歌集と書は別の事にて、鈴屋翁の説を上にならるか如し)。

されは、此うたも約してはやまとうた・からうたといひ、延てはちまどつた・からのつたといふ入き事、今ならいふ入きもあらず。

○田云。のもしのありなしは詞の延約のやうなれど、しかのみにはあらず。のもしあるは、其物をことわるさまにいへる也。のもしなきは、打まかせて其物の名目にしていへる也。たゞへは、うみのうを・かはのうをといへは、其物をことわる意也。うみうを・かはうをといへは、其物の打まかせたる名目になれるか如し。古今序の首にやまとうたはと書出し、は、からのうたに對へる意はありながら、猶わか國の歌なればこ

とわるさまにいふにはあらで、打まかせたる名目の方にていへる世)こは其世のならばしのことたてにいふ時は打まかせたる名目にていへる所にて論ずる世。上に、打まかせたる世の名目にはあらず、といひしとはおもむきことなり。おもひまかせ入からず。からの歌にもまは、其物をことわりたるやうに、少よぞけに書きたる世に、もといへるもしに其ころは(ある事聞するへし。さてこれは隆正かい入る如くなれと、常の對語の如く言の数の對したるにはあらず。詞を障てくとほく心の對したる也。されは、やまとにはものもなし。からにはものもしありて、おのつから親疎の差別を見せたる詞のいひきまむく味ひするへし)順集に、上に挙たる如く一つ二つの文に、からのうたつくり、やまとつたよむと、のもし有無にて對語にしたるも、おのつから親疎の差別見えて、此序におもしき也。万葉の長歌の對句には、近くならひたる詞にも長短さまありて、詞は對せず、心の對したる多かり。されは、顯昭の引たる本のものもしなきは脱たる也。この文、今本のまんにてあるべき也。詞を等置におくやうにたらしむるをよむことおもむきは、此活用の味ひはしるべしとあたはしをせ(源氏に、からのもやまとのもといへる、此のもしには歌といふ言こもつたる一格也。其例は詞玉緒補遺に多く吐せるを見よへし)。